

溝上 慎一の教育論(動画チャンネル) No166

仕事のコツ(コーナー)

いろいろな仕事を欲張ってするために両立する
ストーリーを描く！ 舘野泰一先生（立教大学経営学部准教授）

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

<http://smizok.net/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

【プロフィール】 1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。
公益財団法人電通育英会の助成を受けて行われています

館野泰一（たての よしかず）プロフィール



館野泰一

立教大学経営学部准教授／株式会社MIMIGURI Researcher

1983年生まれ。青山学院大学文学部教育学科卒業。東京大学大学院学際情報学府博士課程単位取得退学後、東京大学大学総合教育研究センター特任研究員、立教大学経営学部助教を経て、現職。博士（学際情報学）。専門はリーダーシップ教育。近著に『これからのリーダーシップ 基本・最新理論から実践事例まで（共著）』（日本能率協会マネジメントセンター）など。



No157

新著の紹介(コーナー)

『パラドックス思考ー矛盾に満ちた世界で最適な問題解決をはかる』



舘野泰一先生

(立教大学経営学部准教授)



それではご覧ください

研究者としての仕事のコツ

立教大学経営学部

舘野泰一

自分自身の「強み」と「弱み」を一言でいえば

「欲張り・あれこれ」タイプ

研究だけでなく、実践もおこないたい

学校だけでなく、企業にも伝えたい

教育だけでなく、経営も学びたい（研究したい）

よくいえば「器用で学際的」、悪く言えば「中途半端」

→ 欲張りの強みが生きて、破綻しないようにすることが仕事のコツ

3つのコツ

- 1.両立のストーリーを描く（重ねる）
- 2.ひとりにならず仲間と研究する
- 3.舞台に立ち続ける

(1) 「両立」のストーリーを描く (**重ねるスキル**が重要)

「研究」か、「教育」か？
(「アウトリーチ」か？)

なるべく **「重ねる」** ことを意識して活動している

例)

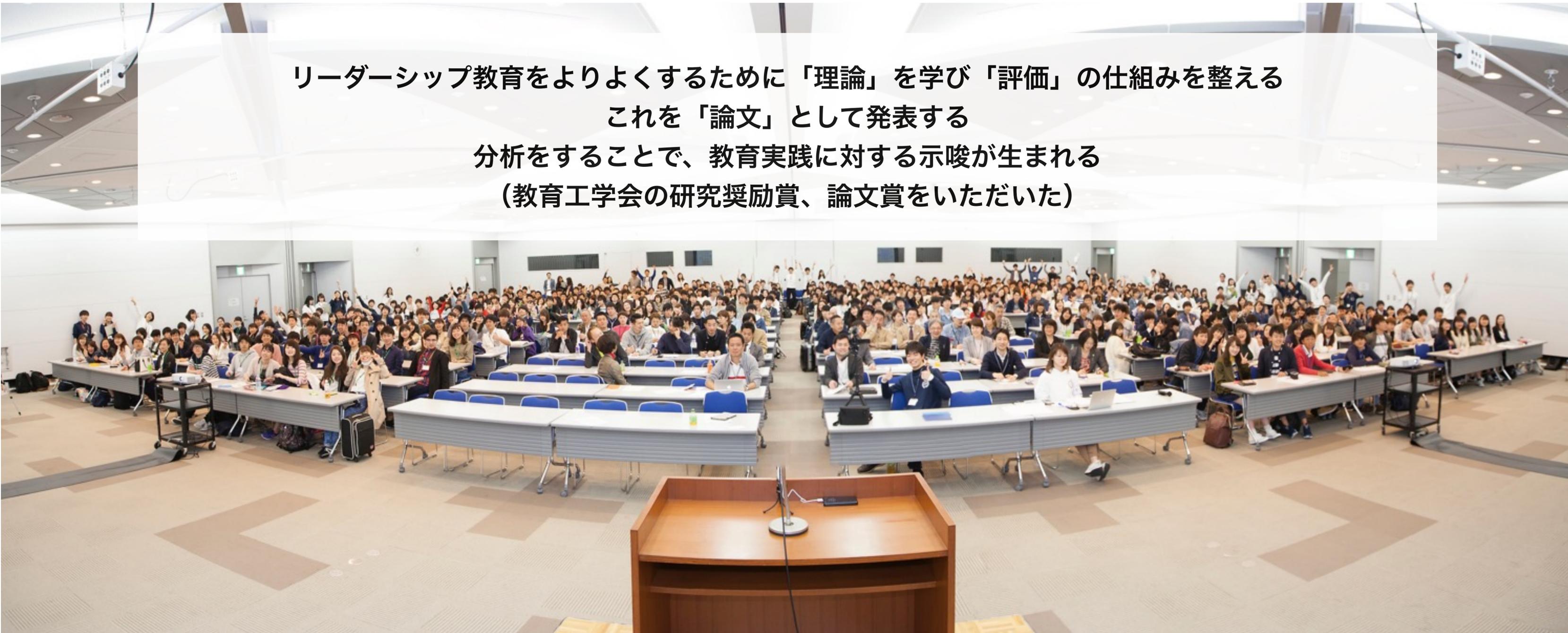
リーダーシップ教育の実践をおこなうからこそ、
新しいリーダーシップ教育の研究知見が生まれる

BLP (Business Leadership Program)

立教大学経営学部のコアカリキュラム (2006年創設)

約400名がアクティブラーニング型授業でリーダーシップを学ぶ

リーダーシップ教育をよりよくするために「理論」を学び「評価」の仕組みを整える
これを「論文」として発表する
分析をすることで、教育実践に対する示唆が生まれる
(教育工学会の研究奨励賞、論文賞をいただいた)



循環する仕組み（あえていうならビジネスモデル）を考える

「バラバラの活動」になると
ただの「力の分散」になる

企業のことを知っているから、よりよい大学教育を考えられる
学校教育に関わっているからこそ、企業へよりよい提案ができる
実践をして現場と関わるからこそ、リアリティのある問いが立てられる
SNSで活動を発信するからこそ、研究に協力してもらえる

→ それぞれの活動が連鎖を生むように、冗長に組み上げる

(2) ひとりにならず、仲間と研究をする (仲間をつくる)

ひとりだと怠惰になってしまう
「玄人」に教えてもらうのが一番早い
話しながら考えるタイプ

自分は「ひとりで山奥にこもって研究が進むタイプ」ではない
「適度なプレッシャー」「どんどん教えてもらう」「話しながら思いつくタイプ」
必ず「定期的な集まり」を設計するようにしている (○○研究会、など)

(3) 「舞台に立ちつづけること」が一番カッコいいと肝に銘じる

「完璧主義」の防止策
アウトプットするのが一番大切
引き下がれない場をつくる

強制的にアウトプットする場をつくって
それをマイルストーンとして研究をおこなっていく
学会に限らず「オンラインイベント」なども活用している

2022年3月、契機となるコラボレーション

組織の「歪み」を手懐ける リーダーシップの最新知見



3/12(土) 10:00-11:30

CULTIBASE 編集長

安齋
勇樹



立教大学経営学部准教授 /
株式会社 MIMIGURI Researcher

舘野
泰一



「パラドックス理論」「パラドキシカル・リーダーシップ」などの海外論文を
このイベントのためにレビューして、研究者以外の人にも伝える

研究者としての仕事のコツ

自分の研究者としてのタイプを 自己認識することの重要性

「器用貧乏的生き方」を辞めたいと研究者になったけれど
自分に「専門特化型」は無理だった
しかし、それは「弱み」であり「強み」である
それが生きるスタイルを「研究者のステージごと」に
編み直し続けることが重要なのではないか